慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『ジャップの収容所』紹介 : 第II部
Sub Title	Jap camp : translation and annotation of selected interviews with citizens of Owens Valley : part II
Author	池田, 年穂(Ikeda, Toshiho)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1999
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.44 (1999.) ,p.9- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000044-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

共立薬科大学
Ann. Rept. Kyoritsu
Coll. Pharm.

『ジャップの収容所』紹介—第Ⅱ部

池田年穂

Jap Camp—Translation and Annotation of Selected Interviews with Citizens of Owens Valley — Part Ⅱ —

Toshiho IKEDA

During WWⅡ, some 110,000 Japanese-Americans, two-thirds of whom *were* American citizens, were interned in ten 'Relocation Camps.' First settled and the most famous, Manzanar camp was constructed in Owens Valley, California. So far, quite a few interviews with Japanese-American internees have been held. It seems, however, to be rather difficult to find the documentation of interviews with the 'ordinary' Caucasians who lived in Owens Valley during the period.

California State University Fullerton Oral History Program, officially inaugurated in 1967, keeps the tapes and its documentation of nearly 2,000 interviews. As to Japanese evacuation and relocation, Arthur A. Hansen and his staff began to concentrate on it in 1973. Their efforts inevitably included the interviews with Caucasians living in Lone Pine and Independence, both situated in Owens Valley and only several miles from Manzanar camp.

The text used for translation is *Camp and Community:Manzanar and the Owens Valley*, 1978, CSUF. The title of the book was originally *Jap Camp* and was changed into the title above through the contest and charges from Japanese-American militants. **Two short interviews with male Caucasians, one the oldest among the interviewees in the book above and the other the youngest, will be introduced in this article**. Readers might be recommended another book, Roger Axford, *Too Long Silent:Japanese-Americans Speak Out*, 1986, which contains interviews with Japanese-American internees.

Ⅰ．オーラルヒストリー・プログラムについて

二十世紀に入って「録音」という技術が誕生したお陰で、インタビューが社会学的研究の重要な武器の一つとなった。

カリフォルニア州オレンジ郡に位置するカリフォルニア州立大学フラートン校（ＣＳＵＦ）のオーラルヒストリー・プロジェクトは、1966年に講義形態として始まり、翌1967年に公的に発足している。ケースによっては20時間にまで及ぶ2,000人近い個人とのインタビュー、延べにして3,500時間以上のテープが保管されている上、48,445頁の文書として記録されている。インタビュイーらのインデックスも、504頁にのぼるShirley E,Stephenson,*Oral History Collection*,1985（以下ＯＨＣと略記）としてまとめられている。

その中でもとりわけ筆者の関心を惹くのは、1972年にアーサー・Ａ・ハンセンを長としてから、より精力的に進められることとなった、第二次大戦中の日系米人強制収容についてのインタビュー（『エスニック・スタディーズ』部門の中の「日系米人史」プログラムに含まれる）の数々である。筆者の調べでは、インタビュイーは140人（同席者は除く）、インタビューの時期も1966年から1984年にまたがっている。因みに年度毎、性別、日系かそれ以外かの別については下のようになる。

１９６６年	６名、	１９６８年	１名、	１９７１年	６名
１９７２年	９名、	１９７３年	５１名、	１９７４年	１３名
１９７５年	３名、	１９７６年	１７名、	１９７７年	１名
１９７８年	１６名、	１９７９年	２名、	１９８１年	３名
１９８２年	３名、	１９８３年	４名、	１９８４年	５名

（不詳１名、１９８１年３名の内１名は１９８２年にもインタビューを受けている）
男　８６名
女　５３名
（不詳　１名）
日系　　９０名
非日系　５０名

ユニークな点は、当然と言えば当然と思えるが、日系米人のみでなく白人（コーカジァン）、それも強制収容に直接には関わっていなかった一般市民へのインタビューが多数含まれていることである。第二次大戦中１０あったリロケーション・センターの内、最も名高いのは、最初のセンターでもあったマンザナーであろう（それに次ぐのが、合衆国政府への「不忠誠者」を中心に再組織されたツールレークかと思う）。マンザナー収容所が事前の予告もないまま建設された地元のオーエンス・ヴァレーの住民、殆どはそれ迄日系米人に関心すら抱いていなかった住民の反応をうかがうのに最適なインタビューが、無論インタビュイー各々の収容所・被収容者への意識や関わりにはかなりの深浅がありはするが、このＣＳＵＦのオーラルヒストリー・プログラムのコレクションの中にいくつも見出し得る。

ことオーラルヒストリーについては、最新のものが最善とは限らない。筆者も数次にわたり日米加三国でオーラルインクァイアリーを試みてきたが、年月と共に経験者が物理的に存在しなくなったり、知的に衰える例は多い。また、後年になって種々雑多な情報や知識が入ったものをあたかも自らの体験のように錯覚したり、自分の経験やその折の感覚を自分の人生のパースペクティヴの中にでなく歴史のパースペクティヴの中に過度に整理して配列したり「合理化」したりすることもある程度は避けられない。また、高齢者によく見られるが、信憑性を高めようという意識からか、年月日等ディテールに非常なこだわりを見せることもある。但し、インタビューはインタビュイーの話の矛盾を指摘することに目的がある訳ではないので、裏付けや訂正のないまま録音されていくことになる。更に、インタビュアーが白人であるか日系であるか、はたまた日本から来た研究者であるかにより、インタビューの内容にニュアンスの差が生じる可能性も高い。勿論、インタビュアーの側の視点や態度もインタビューの成否に影響を与える。完全にニュートラルなインタビュアーというものは存在しないが、時として自分の歴史理解やステレオタイプにとらわれて、インタビュイーを誘導したり、質問の内容を自主規制することもある。これは1991年に筆者が翻訳を刊行した Roger Axford, *Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out,* 1986, 邦題『リロケーション - 日系米人強制収容の証言』西北出版、の「訳者あとがき」にも記したことだが、一世の中には、トラウマチックな体験を過小評価しようとする心理メカニズムを見せる者もいれば、社会学的なレファレンス・グループをどこに求めるかによっては『キャンプ生活はヴァケーションじゃった』と表現する者もかなりいたが、一般にそうした発言は日本人研究者のインタビュアーには好まれない。

日系米人強制収容について言えば、「公民権運動」という全米的な分水嶺を越える前と後では、ターミノロジーさえ異なってくる。その一つが「ジャップ」という呼び方である。ジェシー・ギャレットとロナルド・ラーソンは1977年、第二次大戦中にオーエンス・ヴァレーの住民だった白人達（一人、夫妻の内の妻の方が中国系）へのインタビューを20抜き出して*Camp and Community:Manzanar and the Owens Valley*として刊行した。ところが、これは元々*Jap Camp,*『ジャップの収容所』というタイトルであり、そのタイトルで広告もうたれていたものが、前年1976年に一部の日系市民からの強硬な申し入れにより変更されたものである。その顛末自体極めて興味深く、我が国におけるパラレルな問題と重ね合わせることも出来ようが、詳細の紹介は他の機会に譲ることとする。

合衆国の60年代は、公民権運動、ベトナム反戦運動、反公害運動の三つの運動で記憶されるであろうが、ジャップという言葉を用いるのは（ニップも同様）その時代背景の中では当然忌避されるようになっていた。それでも、例えばアグニュー・メリーランド州知事の1968年の副大統領選挙キャンペーンの途中での日系二世ジーン・オオイシに対する「ファット・ジャップ」発言のように、深刻な「失言」事件もおきている（詳しくは、当事者により、*In Search of Hiroshi,* 1988、翻訳は『引き裂かれたアイデンティティ』染矢清一郎訳、岩波書店、1989年、の中に書かれている）。本稿で紹介するインタビューの中でも、少しの底意もなくジャップという表現が用いられている例が見受けられる。無論、底意のなさにこそ未だ意識が改められぬ証しがあると見ることも出来ようが。

Ⅱ. 紹　介

本稿では、20人のインタビュイーの中で最年長者のA．A．ブライアリーと、最年少者のフランク・ハリーとをとりあげる。因みに、20人のインタビュイーの生年を年代別に見ると、

1880年代	1名	
1890年代	1名	
1900年代	7名	
1910年代	9名	
1920年代	1名	（不詳1名）

となる。また、収容所が出来た年（1942年）の年齢から見ると

10代 …… 1名	20代…… 4名
30代 …… 11名	40代…… 2名
50代 …… 1名	（不詳1名）

となっている。

(5) フランク・ハリーは、OHCによれば、1929年生まれ。1973年12月20日に、アーサー・A・ハンセンと、デヴィッド・ベルタニョーリの二人にインタビューを受けている。午後5時からのインタビューで、場所はローンパイン鉄道駅。テープは、30分のものが保存されている。Hは、ハンセン。Bは、ベルタニョーリ。Fが、インタビュイーのフランク・ハリーをさす。

H：ハリーさん。まず初めに、あなたの個人的背景について二、三質問させて下さい。1942年に当地マンザナーに収容所が設置された時にはおいくつでしたか？

F：13歳で、7年生でした。7年生か8年生でした。

H：ローンパインにはずっと住んでいらしたのですか？

F：はい。僕はここで育ったんです。

H：ローンパインでお生まれになったのですか？

F：はい。もっともここよりは16マイル東寄りの所ですけど。

H：私たちは、子供の目で見て何が起こっていたのかを知るのに興味をそそられるんですよね。年齢の違いによって物事も時に違って見えるということがあるものですから。学校の子供たちから恐らく多くのことをお聞きになったんじゃないかと思うんですが、どうでしょう。収容所についてどんな話が出ていましたか？　覚えておられますか？

F：ええ、ただあそこに転住収容所を建てることが計画されていると聞いただけで、それから建設されるまではもう何も聞きませんでしたね。その内勿論、あの輸送隊がやってきました……それを見ていましたよ。他の子供たちと同じでしたよ。目を瞠って、怯えてていたんだと思います。何のことだか分からなかった。ただ思い出せるのは、車が来たこと。何千台も次々と一日中やって来て、マンザナーへ向かっていたっていうことです。みんな収容所へ向かっていました。何でそうなるのか何のためか、一切分からなかったんですよ、本当に。ただもう無闇に怖がっていたんです。

H：日本人だから怖かったというわけですか？

F：ええ、ここには日本人も含めて一切マイノリティはいなかったんですよね、本当に。僕らは彼らの正体も分からなかった、一体何の騒ぎなのかも分からなかったんです。

H：戦争映画を観た時はいかがでしたか、たとえばジョン・ウェインの映画などですが、映画では日本人は……

F：ええ、映画では日本人は本当に残酷でしたね。でもその時見た人たちは僕にはそういう印象を全然与えませんでした。

H：収容所にいらっしゃる機会がおありでしたか？

F：いいえ。ですが彼らとはクリークの所でよく会いました。彼らは外に出ていいことになっていたのかどうかも知らないんですけど。多くは年かさの人たちで、収容所の裏の方で釣りをしたりしてました。その人たちにクリークの近くで会って話したりしたんです。

H：年かさの人たちだったんですか？　そこまで釣りに行っていたのはどんな人たちだったんでしょうね？

F：僕ら子供たちですよ。ジョージズクリークなんかに行ったりしてたんです。そこで彼らに会ったんです。僕

らは、彼らが外出の許可を得ているんだと思いました。彼らは変わった感じもしませんでしたし、何かされたわけでもありません。ただ話をしただけです。

H：ローンパインの学校と収容所の子供たちの間で陸上の競技会のようなものがあったように聞いているのですが、本当ですか？

F：僕自身はあったことを思い出せないんですが、あったのかも知れません。あってもおかしくはないでしょうね。

H：収容所についてはどのような情報がありましたか。何か情報源はあったのでしょうか？

F：いいえ、子供同士の噂話だけです。僕らの知っていたのは、ただ大きな収容所があって、兵士がいて監視塔があるってことだけでした。そのそばを車で通ってものぞかないことすらありました。

H：お宅の家族ではあそこに雇われていた人は誰もいなかったのですか？

F：ええ。ただあの収容所で憲兵をしていた義兄がいました。

H：その方はその頃もうあなたのお義兄さんだったのですか？

F：いえ、姉とデートしていた頃です。それから当地に駐在中に結婚しました。

H：お義兄さんが何か話を持ち帰ってきたことはありましたか？

F：はい、今年の夏ここへ来た時に一つ話してくれました。戻ってきて収容所を訪れたんです。僕たちはあそこへ出かけて、跡を見渡し、衛兵の小屋がどこだったか跡づけようとしてみました。そこで義兄は自分があれをどう考えているかみんな話してくれたんです。あそこでの殺人、射殺についても話してくれました。

H：どうおっしゃったのですか？

F：ええ、義兄の言いますには、あれは大部分若い男、少年のような若い者たちばかりで、子供がみんなそうなように傲慢で、外へ出たがったのだそうです。彼らはお構いなしに門をぬけようとして、守衛は出てはいけないと彼らに言う。明らかに彼らが出口を無理に押し開こうとしたので、守衛が発砲して殺したのです。義兄の話ではそんな風でした。

H：じゃあ、お義兄さんはその晩あそこにいたのですか？

F：ええ、あそこにいました。

H：収容所について、この地域で一緒に育った誰か他の人とお話になったことはありますか？　当時は少々好奇心の強い年代だったんでしょう？

F：あれに大して注意を払ったことはなかったんです。収容所はそこにあって、町でよく数人の日本人は見ましたけど、彼らは監視付きでトラックに乗って来ましたし、僕らはそれについて大して考えたことがありませんでした。

H：それで、収容所が中止となった時、あなたは高校生くらいの年齢になっていたわけです。多分17歳くらいだったでしょう。ご自身兵役に就かなければなりませんでしたか？

F：1946年に行きました。徴兵されたんです。その後で、再志願もしました。

H：日本に駐屯なさいましたか？

F：いえ、僕はヨーロッパへ行きました。イタリアです。それで、そこでもって日本人にも沢山会いました。問題なかったですよ。

H：それでは日系米人と一緒に兵役を務めていたわけですね？

F：ええ、そうなんです。

H：彼らと収容所の体験についてお話しになったことはありますか？

F：あの連中はひとりも収容所には行かなかったんですよ。彼らは僕と同じで子供だったんです。僕は、その時で18か19でしたから。

H：でも、当地では子供も収監されていましたよね？

F：そう。いや、僕らは子供には一度も会いませんでした。少なくとも僕は子供には誰も会わなかったです。

H：それでは戦後あなたが軍隊で出会った兵士は誰も収容所にはいなかったんですね？

F：私の知る限りはです。実のところ、彼らに向かって収容所の件に触れた覚えすらないんです。そうする理由もありませんでしたから。

H：日本との戦争が終わって僅か2年後のことです。軍隊の中に日系人兵士に対する敵意があるように見受けられませんでしたか？

F：いいえ、ヨーロッパではありませんでした。

H：日系人兵士の評判はどうでしたか？

F：良かったです。良かったですよ。彼らは良い兵隊でした。静かな人たちで、決して他人に迷惑をかけませんでした。休暇でも何でも、他の部隊とは決して交わらなかったですね。

H：442連隊の英雄的活躍をお聞きになったことはありますか？

F：ありますとも。

H：あるんですか？

F：ええ、勿論僕らもそれを耳にしました。

H：彼らの活躍を高く評価してらしたんですか？

F：ええ、そうです。それから黒人部隊のこともです。良い部隊でした。

H：御家族は第二次大戦中このローンパインで何をしてらしたのですか？

F：父はキーラーのソーダ工場で働いていました。ナショナルソーダプロダクツと呼ばれていた工場です。父はそこで引き込み線の信号係をしていました。うちはそこに住んでいて、それから町へ来たんです。父は日本人については何も言ったことがありません。

H：つまり町の周辺では収容所についてはかなり冷静だったのですね？　余り敵意はなかったのですか？

F：そうですよ。冷静なものでした。日本人とよりは、兵士たちとの方が悶着が多かったと思います。

H：兵士たちとはどのような問題が起きたのですか？　思い出していただけますか？　地元の娘さんたちを拐かすとかそんなことでしたか？

F：ええ、親たちの多くはそれを考えていたと思います。彼らは兵隊の例に洩れず、バーに行っては大酒を飲んで酔って騒ぎました。軍が連中を拾い集めて、宿舎へ連れて戻ったんです。兵営のある所ではどこでも当たり前のことです。

H：つまり町は軍の町のようになっていたというわけですね？

F：まあ、あそこには軍が駐屯していましたから。でも彼らが町へ来るのはいつでも休暇ででした。義兄は、沢山問題を起こすかどうかについて、日本人のことを余り話してませんでした。実のところ、義兄は彼らのことをひどく気に懸けていたんです。自分がイタリア人だったんで。名前もパット・トルトレロというんです。あの人たちのことは、とても気に懸けていました。ただ問題があったのは若い人たちでした。

H：学校へ行っている間に、誰かのことを「ジャップびいき」（Jap-lover）と呼んでいるのを耳にされたことはおありですか？

F：いえ、その言葉はなかったですね。ニップスという呼び方を聞いたことがありますが、僕はそのことは気にもとめなかったんです。

H：時に収容所に収監された人々を「良いジャップ」と「悪いジャップ」とに分けたりしました。こういう言葉をお聞きになったことがおありですか？

F：いえ、こちらではありませんでした。

H：当時はこういう風な区別に気がつかれなかったのですね？

F：ええ、あの頃は若すぎて、大して気にしてなかったんです。

H：ハリーさん、多分デヴィッド・ベルタニョーリからもいくつか質問があると思います。

B：クリークの所で釣りをしていた時、何人かの日本人に会って話をなさったと仰いましたね。その人達はどんなことを言ったのですか？

F：いやあ、僕らは釣りはどんな具合かとか雑多なことを話したんです。ただ収容所のことは話したことがありませんでした。それは覚えています。

B：若い日本人達でしたか？

F：いいえ、年かさの人達でした。つまり、その頃の僕にとって年かさの人たちというのは四十歳以上ということです。

B：その人達は釣りはうまかったんですか？

F：そう言えますね。彼らのには魚がかかったけど、僕らのにはかかりませんでしたから。

B：その人達が自分達の釣り方や何かを教えてくれましたか？

F：いいえ、彼らはクリークの片側にいて、僕らは反対側にいたんです。話のやりとりはありましたが、釣るのに忙しかったんです。僕らは、彼らが許可を得ているんだろうと思いこんでいたんですが、後になって分かったところでは、彼らは裏門をこっそり抜け出て来たということなんです。

B：その人達はどんな道具を使っていましたか？
F：釣り竿を持っていましたよ。
B：どこで手に入れたのでしょう？
F：分かりません。多分持って来ていたんでしょう。
B：あなたはどんな餌を使っていらしたんですか？
F：ミミズです。僕らは、イクラや何かは買うお金がなかったので、自分達でミミズを掘らなきゃならなかったんです。
B：お宅で兵士をもてなしたことはありましたか？
F：今義兄になっているのと、義兄の友人数人だけです。
B：兵士達は収容所とか、日本人一般について何か言っていましたか？　誰か日本人と話した人から何かお聞きになったことがありますか？
F：もう一人の義兄がガダルカナルで日本人と戦いましたけど、余り沢山はやっつけませんでした。
B：私の言うのは日系米人ということで、日本の日本人ということではないのです。マンザナーの収容所にいた人達のことです。
F：いいえ、僕の会った日本人も、家に義兄と一緒に来た兵士達の誰も収容所については一言も口にしませんでした。
B：お母様は収容所についてどうお考えでしたか？
F：いえ、母がそれについて何か言ったかどうか覚えていません。母は、あれを見たことがないんじゃないかと思います。
B：それではこれ以上質問はありません。ハリーさん、カリフォルニア州立大学フラートン校日系米人オーラルヒストリー・プロジェクトは、あなたが貴重なお時間を割いて協力して下さったことに感謝しております。有り難うございました。
F：どういたしまして。

（6）A．A．ブライアリーは、OHCによれば1884年生まれ。インタビューは、カリフォルニア州インディペンデンスで、1973年12月6日にデイヴィッド・ベルタニョーリとアーサー・A・ハンセンによって行われた。30分の長さのテープが残されている。Bは、ベルタニョーリ。Hは、ハンセン。Aが、インタビュイーのA．A．ブライアリーをさす。

前述のようにこのインタビューは、カリフォルニア州立大学フラートン校オーラルヒストリー・プロジェクトの『エスニック・スタディーズ』部門中の「日系米人史」プログラムによって行われたが、この他にブライアリーは、『環境調査』の部門においても1976年11月19日にインタビューを受けている。その折りのインタビュアーは、C.エリス・デラミーターで、内容は、ロサンゼルス市への水利権譲渡交渉や、灌漑区などについて。1時間25分のテープが残されている。

B：ブライアリーさん、このオーウェンス・ヴァレーでのあなたのこれまでについて何かお話し願えませんか？
A：ふむ、儂はビショップの南半マイル程の所で生まれて、ここに生涯ずっと住んで来たんだ。儂はいつでも牧牛をやっとったし、政治もかじってきた。国の誰と比べても、足りない時間、少ない儲けで、より沢山の仕事をやってきたと思う。学校で教えたし、インヨー郡教育委員会のメンバーでもあったし、インヨー郡教育長にもなったし、一時は保安局にもいた。保護観察官もやったし、課税額査定人もやっとったんだ。無論一どきにやっとった訳じゃないがね。
B：何か政治に関わっていたと言われましたね？
A：ああそう言ったよ。
B：何か公職に立候補なさったんですか？
A：ああそうだ。どれも選挙で選ばれる公職だった。
B：ほう、そうですか。第二次世界大戦の時にはどのような地位に就いておられましたか？
A：インヨー郡土地測量官だった。35年間その地位に就いとったんだ。
B：つまり第二次世界大戦の間中、郡土地測量官でいらした訳ですね？
A：そうだ。

B：たまたまマンザナーの収容所敷地を政府のために測量なさったって事もおありだったんじゃないですか？
A：いいや、それはない。一時あそこには町があって、居住区や街路や何かがあったので測量の必要はなかった。ロサンゼルス市があそこを買い上げて住民がすべて出て行かされるまでに、もう居住区が出来ておった。もしくは、以前にはあったということじゃ。
B：差し支えなければご年齢を伺いたいんですが。
A：89才だ。
B：学歴はどのようなものでしょう？
A：ロサンゼルスのハイスクールへ行ったんだ。オーウェンス・ヴァレーにはハイスクールがなかったから、小学校を終えてからあそこへ行った。儂がオーウェンス・ヴァレーから外へ出たのはあの時だけだ。
B：それじゃ、ロサンゼルスに4年間お住まいになった？
A：いや、往ったり来たりしとったよ。
B：週毎ですか、それとも月毎で？
A：いや、週毎なんか行けやせん。当時はチームを組んでビショップからロサンゼルスへ行くのに11日はかかったもんだった。キーラーへ行く狭規の鉄道に乗って、そこから乗合馬車に乗ったんだ。そこからモハーベへ出るのに20時間、そこから又ロサンゼルスへ出る。だからとんぼ返りなどできなかった。あっちへ行ったら冬中ずっと留まって、夏に帰って来たんだ。
B：なるほど。日本人が収監されていた間にマンザナーと何か接触がありましたか？
A：いいや。
B：誰か友人で接触された方はいらっしゃいませんか？
A：そう、地方検事のジョージ・フランシスがおったよ。だが他には思い出せんな。
B：その方が何か収容所について話された事がありましたか？
A：収容所の事は一度も何も話さんかった。元の計画ではオーウェンス・ヴァレー全体を取り囲む話だったとは言っとったな。無論土地をすべて持っとったのはロサンゼルス市だった。彼らは送水施設長のH．A．ヴァン・ノーマンと折衝せねばならんかった。ヴァン・ノーマンと折衝したところが、彼は言ったのさ、「それだけの土地を全部開墾用に返すとなったら、ロサンゼルスは水をどうするつもりなんですか」ってな。それでこの話も留めを刺されてしまって、それでこのマンザナーの敷地が決定されたって訳だ。
B：日本人が真珠湾を爆撃したと聞いた時はどんな気がしましたか？　それから1万人の日系米人をこのオーウェンス・ヴァレーへ、ほとんど自分の家と目と鼻の先へ収監するという事になったと聞いた時はどうお感じになったでしょうか？
A：人数がどれくらいかは今でも知らないんだ。1万人だったんか。
B：はい、1万人の被収容者がいました。
A：そうか、それは知らなかった。爆撃の事を聞いた時は汚いやり方のように思ったよ。当時ワシントンに交渉役の日本人がいて話し合いをしておると思っとったからな。そうしていて背中から刺しおった訳だ。人々は大変恨んどった。
B：それで、日本人をこのオーウェンス・ヴァレーに収監するという事について初めてお知りになった時はどうお思いになりましたか？
A：彼らがマンザナーにいる限り何ら構いはしなかった。ジョージ・フランシスが儂らに、ヴァレー全体を使う事はないともう話してくれていたからな。
B：一般的に町の人々は恐れていたようでしたか？
A：いや儂は恐くなぞなかった。儂の頭には恐いなどという考えが入った事はないのだ。
B：ヨーロッパ戦線での日本人連隊の存在と、彼らの英雄的な活躍をお聞きになった事がおありですか？　442連隊は大変多く勲章を授けられた部隊でした。
A：彼らの事は聞いたことがあるように思う。だが特に何か知っていた訳じゃなかったよ。
B：それでは、彼らについて、彼らの名高い活躍について聞いただけでも、町の人々が日本人に対して好感を持つようになったとお思いですか？
A：いや、思わん。町の住民が日本人に好感を持っていたとは思わん。
B：人々は彼らがここにいるのを全く望んでいなかったとお思いですか？
A：そう思う。このカリフォルニア州では、いつか知れんくらい昔から中国人（Chinaman）はおった。初めて

見た日本人の事を覚えとる。ここにもそれより前から中国人は一人おった。小さな町々には皆中国人街と中国人がいて、連中は自分たちのことだけにかまけておったが、ちゃんと敬意も受けていたし、こっちも連中をあてにもできたし、連中に対して好感も持っとった。そういう感情はジャップに対しては一度もなかった。中国人は中国人でおるのに満足しとったが、日本人は日本人以上のものになりたがって、割り込んできよる。

B：つまり、前にも日本人はオーウェンス・ヴァレーにいた訳ですね？

A：最初に見た日本人はビショップのホテルで働いとった二人の男だった。儂は子供だった。多分10才位だったろう。

B：町の人々は彼らをどう扱ったのですか？

A：いや何という事もなかった。その二人はただ日本人のコックだったというだけで、儂らは彼らに何の注意も払わんかった。郡に一人か二人というような時は、注意など払わんものだ。

B：しかし収容所が設置された時は、町の人々がそれに心から腹を立てた。彼らにいて欲しくはなかったとお感じなのですね？

A：いやこの町の事は知らん。そんなことは考えた事もない。連中だってどこかへ置いとかなきゃならん、多分置いとくべきなんだろう。あそこにいれば誰にも悪さはせんのだからそれで良いとは思っとった。町の人々が気にしとったとは思わん。良く覚えとらん。だが商店主の一人が連中が自由に町へ来て買い物ができれば良いと考えたのはよく覚えとる。町の人々らはそれを承認せんかった。

B：その商店主が誰だったか覚えていますか？

A：アレックス・クレイターよ。

B：で、町の人々は彼らに町に来て欲しくなかった訳ですね？

A：連中があそこにいる限り問題はなかった。しかしほとんど誰も本気で連中を信用しておらんかった。前に儂が言った事に戻るが、人々は中国人を信用したように日本人を信用した事は一度もなかったんだ。

B：アーサー・A・ハンセンをご紹介します。いくつか質問をしますので。

H：収容期間中に町でも随分話題になったんじゃないかと思うんですがね。何と言っても町から2、3マイルかそこらの所に1万人がいた訳ですから。あなたは恐くなかったと言われたのは分かりましたが、町のお知り合いの方々の間に何らかの恐怖心があったとお考えでしょうか？

A：さあ、あったかも知れんな。儂は聞いた事はなかったが。

H：収容所が町に及ぼした経済的影響は如何でしたか？

A：いや、それは本当に儂の何も知らんところだ。本当に知らん。

H：誰か収容所で働いていた町の人を御存知でしたか？

A：いや、儂はそういう人たちに何ら注意をしなかった。一人もう亡くなってる男で、あそこの暖房炉の世話をしとった奴を知っとるが、彼と収容所について話した事など一度もなかった。

H：先に話をされた中に、商店主の一人が日本人の一部が町へ買い物に出て来る事を望んだけど、それに反対する運動があったという話がありましたね。この運動がどのような形で起こったか覚えておいでですか？

A：特に運動というようなものがあったとは思わん。ただ連中に町に来て欲しくないと町のみんなが話し合ったんじゃ。

H：収容所が解散した後で日本人が居残るのではないかという恐れはありましたか？

A：いや、それはなかったと思う。彼らが居残ろう場所などなかった。ロサンゼルス市が土地をみんな持っておったし、いずれにせよ灌漑用の水を供給してやらんかったじゃろうからな。

H：何か偶然にでも収容所の職員と接触をお持ちになった事はありませんでしたか？

A：いや、一度もない。

H：その当時教育委員会に関っていらっしゃいましたか？

A：いや、当時は違う。

H：収容所で払われる給料が良いものだから、周辺地域の教師の中には地元の学校よりも収容所で教える事に魅力を感じた者がいたという噂がありました。多分お聞き及びではないかと思いますが？

A：さあ、儂は聞いた事がない。知らん話だ。

H：何か収容所で生じたトラブル、どんな類の物でもお聞きになった事はありませんか？

A：トラブルがあったのは知っとるが、実際にどんなものだったかは知らん。前に話した地方検事のジョージ・フランシスがあそこへ行った訳だが、彼の話によれば態度がやや不穏だったそうだ。

H：どのように不穏だったのですか？

A：つまり白人に対して不穏で、フランシスに対して不穏だったんじゃ。

H：彼は何か暴動のようなものが起きそうだと感じたんですか？

A：さあ、分からんな。フランシスなら多分話してくれるだろうさ。連中はフランシスに対して友好的な感情は持っとらんかったんじゃ。

H：マンザナーにいた人々の内３分の２がアメリカ市民だったという事は正しい状況だったと思いましたか？この収容所にアメリカ市民と、外国人である彼らの親たちを一緒に入れたのは良い考えだったと思いましたか？

A：ああ、何故なら、問題ないジャップらの保護になったと思うからな。ジャップがやった事の後では、ジャップ達は保護してもらえる所にいなかったら袋叩きにあっていたような感じがあった。

H：同様に敵であったドイツ人やイタリア人についてはどうでしょう。彼らも日本人と一緒にマンザナーに入れられるべきだったとお考えですか？

A：分からん。それについて考えてみた事がなかったからな。だが、この戦争の間だったかもう一つの第一次大戦の方の間だったかも知れないが、人々が「ここのドイツ人たちを殺しちまったらどうだろう…」と言っとったのは覚えておる。だから同じ事だ。ただ、無論人種感情って奴があったんで、話が違った事もあったろう。

H：ひょっとして、この春マンザナー収容所跡に記念の銘板を設置した事をお聞き及びですか？

A：ああ、それは聞いた。

H：銘板の表現に対するあなたの反応をうかがって、賛成なさるかどうか知りたいと思います。銘文を読み上げますから、反応をおっしゃって下さい。

「第二次大戦の初期に、日系の祖先を持つ十一万の人々が、1942年２月19日発令の行政命令九〇六六によって転住収容所に収監された。
十ヶ所に及ぶそうした強制収容所の最初のものであったマンザナーは、有刺鉄線と監視塔によって囲われ、過半数アメリカの市民からなる一万の人々を収監していた。
ヒステリア、人種差別及び経済的搾取の結果として当地において被られた不正と屈辱が二度と再び現れる事のなき事を。」

この銘板は1973年４月14日に、主として日系米人からなりますが白人も含んでいるマンザナー委員会と日系米人市民連盟（ＪＡＣＬ）の共同であそこに設置されました。この声明の中で何か異義をはさみたい所がおありですか？

A：うん、何かあったんだが、何だか忘れてしまった。それは別として、前に言った通り、儂は連中が閉じ込められた事は良い事だったと思っとるんだ。強制収容所（concentration camp）なんて呼ぶような代物だったとは思わない。あんたらはどんな風に呼ぶか知らないが、連中は寄せ集められて連中自身の保護のためにあそこへ囲われたんだ。忠誠ではなかったかも知れん奴らを含めてだ。この町に住んでいて、この郡で育ったドイツ人の女を二人知っとるが、あのドイツとの戦争の間中二人は断然ドイツをひいきにしておったよ。実際二人はあそこへジャップを訪ねに行ったんだ。ドイツ人がこの同じ場所で育ってもまだドイツに忠誠を感じていたとすれば、日本人はどうだったと思う？　連中の多くも同じ事だったに違いないさ。

H：強制収容所というとどのようなものをお考えになりますか？　ドイツにあったようなものでしょうか？

A：そう、人々を囲い込んでよそに悪さをさせないようにするための所だな。儂のマンザナーのイメージは違う。あそこはもっぱら、あの連中をあそこへ入れてみんながジャップの方を向かないようにし、連中を場所によっては〔怒り狂った〕アメリカの民衆から守るために考えられた事じゃないのかね？

H：つまり、あれはアメリカ民衆の保護であるよりは彼ら日本人の保護だったという訳ですか？

A：そうだ。

H：マンザナーのような収容所が設立された理由として示されている三つの表現については如何でしょう。一つ、マスヒステリア、二つ、人種差別、三つ、経済的搾取や貪欲。これら三つをどう思いますか？　マスヒステリアについてどうでしょう。このインディペンデンスやローンパイン周辺でマスヒステリアに近いような状況があったとお思いですか？

A：いや、ここでそんなものは全くなかった。

H：しかし、真珠湾やそれ以降に、たとえばロサンゼルス地域や合衆国全体については、これは的確な表現だとお思いですか？

A：よそではヒステリーもあったかも知れん。しかしここには全くなかった。
H：人種差別についてはどうでしょう？
A：ふむ、少し話が脇へそれるが良いかね。ビショップで儂のために働いてくれているインディアンがおって、儂は彼をほんの子供の頃から知っておるんだが、ある時黒人やインディアンなどについて彼と話した事がある。彼は言ったよ。「私たちは誰でも人種感情っていうのを持っています。否定しても仕方ありません。」とな。そういう訳なんだ。人種感情は確かにあったさ。
H：それでは経済的搾取については如何ですか？　日本人は経済的に搾取されたとお思いですか？
A：ふむ、儂の知っておるのは、ただ人々が連中の持っていた財産を如何に手に入れたかという事だけだ。それが本当に彼らをあそこへ囲いこんだ事の背景にあったとは思わん。彼らがあそこへ入ったので、財産が空き家になって、それを使った者がいたという事じゃと思う。
H：彼らのここマンザナーでの暮らし方についてはどのように心得ていらっしゃいましたか？　彼らについての噂をお聞きになりましたか？　彼らは自分達の育てた野菜などをこの町で売ってもらっていましたか？　それでなければ、彼らがあそこにいるという事以外にどんな風にして彼らの存在を感じられましたか？　彼らの活動や暮らし方について何か継続した情報のようなものはありましたか？
A：あったかも知れん、あったとしても儂は大して注意は払わんかった。儂は道路を往き来していただけだ。連中があそこにいるという事は知っとったが、それがほとんどすべてだ。
H：デイヴィッド、何か他にブライアリーさんに質問があるかね。
B：ええ二、三個人的な意見についての質問があります。もし日系米人が収監されないでいて、もし日本人がカリフォルニアに侵入したとしたなら、日系米人が彼らを助けたとお考えですか？
A：ああ、多くの者はしただろう。したに違いない。
B：どのようにしてですか？
A：どういう風にであれ、できる事をやっただろうさ。
B：このような事が再びアメリカ合衆国で、いずれかの人種に対して起こり得るとお考えですか？
A：ふむ、それは答えにくい事だな、何とも言えん。
B：いえ、ただどう思うかだけお聞かせ下さい。
A：うん、そういう事も再び起こり得ると思う。
H：私ももう一つ質問をしたいのですが、ブライアリーさん、マンザナーの運営についてです。収容所長は何人かいましたが、一番長く任にいたのはラルフ・P・メリットでした。何かメリット氏についてお聞かせ願えませんか。
A：彼はかなりうさん臭い評判を持つ男だった。一時カリフォルニア大学と関係を持っとったと思うが、そこではどうも万事正しく事が行われているようではなかった。サンメイドレーズンカンパニーの支配人だったとも思う。何が問題だったかは知らんが、商会は彼を解雇しようとしておった。メリットは自分を解雇しようとしていた集会に出席した。そうすると誰も立ち上がってその動議を出す勇気のある者はおらんかったので、商会は彼を再雇用したんだ。ダーウィンの近くには鉱山が一つあって、元々ジャック・ガン、それからその未亡人、次いで娘のエレンのものだった。そこには一つ登記されていない採掘権があって、メリットはその採掘権を入手するために奴の影響力を使ってどこかから10万ドルだったと思うが調達して来たんだが、ガンの未亡人も娘もその金を眼にする事は全くなかったんだ。
H：メリット氏が所長だった時、彼がややうさん臭い背景を持っているという事は広く信じられていたのですか？彼はインディペンデンスの人々には疑惑の眼で見られていたのでしょうか？
A：そうは見られてなかったろうと思う。彼らの大部分はこの件については何も知っとらんかったからな。
H：それでは、これは当時良く知られていた話ではなかった訳ですね？
A：そうだと思う。
H：彼はインヨー郡出身の人ですよね。
A：いやいや。彼がどこから来たのかは知らん。元はサンフランシスコ湾の辺りの出身じゃないかとは思う。
H：おや、それでは彼は地域の昔からのメンバーではなかったのですか？
A：そうだ。
H：メリット氏と個人的にお会いになった事はおありですか？
A：ああ、会って少し話をしたことがある。

H：何に関した話でしたか？

A：ふむ、何せ昔の事なのではっきりせんな。ただ彼と話をした事を覚えとるだけだ。

H：当時彼がたとえば町の親睦団体などに姿を現したのを覚えておられませんか？

A：ふむ、彼はインヨー郡に、今はインヨーアソシエーツと呼ばれているものを組織したんだ。彼が発足メンバーを集めた。そいつを知っているのは、彼が商業会議所を代表すると目されていた男やその他の色々な所の組織から人を集めておったからだ。彼は一人二人儂の好かん奴を集めておった。彼は自分を信じてくれるような連中を発足メンバーに選んだんだ。郡の役人は一人も含めようとしなかった。

H：それは戦前の1930年代の事でしたか？

A：いつの事だったかは覚えておらん。

H：戦前だったか、戦後だったかは分かりませんか？

A：いや分からん。

H：でもそれが起こった事は覚えていらっしゃる。

A：それは覚えとるよ。儂は郡の役人だったが、彼はインヨーアソシエーツに郡の役人を一人も入れようとしなかったんだから。

H：つまり彼は郡の役人は全てあてにしなかった訳ですね？

A：そうだ。

H：メリット氏について何か他に付け加えたい事がおありですか？

A：ふむ、彼がインヨーアソシエーツを組織した時、ジェス・サトリフの事務所で二、三回会合が開かれたのを知っておる。今では弁護士の事務所が入っている所だ。そこで彼が誰をメンバーとして選ぶか、役員は誰にするかなどを話し合ったんだ。彼はいつも出席しておった。無論儂はその会合には出んかった。彼らは郡の役人を入れたくなかったんじゃからな。

H：インディペンデンスを牛耳っていたのは誰だったか覚えていらっしゃいますか？　1930年代と1940年代の初期にはどういう人たちが実際に「時の権力者」だったのでしょう。町を動かしていたのは誰だったのですか？

A：ふむ、それは難しい質問だな。その頃については覚えておらん。しかしジョージ・ネイラーが長いことインヨー郡郡政執行会議の議長だった。もう亡くなったがな。もう一人はジョン・ラブケンで、こちらも最近亡くなった。彼はローンパインに住んでおった。この二人が郡政執行会議で支配的な人々だったと言って良かろう。

H：それで彼らはこのインヨー郡に昔からいる家系の人たちでしたか？

A：そうだ。

H：彼らは富裕な人たちでしたか？

A：ふむ、富裕ではなかった……良く分からん。ネイラーの一家は1860年代にここへやって来たが、ほぼ同じ頃ラブケンの父親も来た。ジョンは1876年にローンパインで生まれたんだ。

H：そのお二人のどちらかのでも、マンザナー収容所の存在に対する態度を覚えていらっしゃいますか？

A：ふむ、彼らはジャップもどこかに置かれなけりゃならん事は分かっていたし、きちんと隔離されておれば問題ないと考えとったと思う。

H：〔日本人の買い物を望んだ〕商店主達に圧力がかかったという事とこれらの人々とは関係があると思いますか？

A：いや思わん。ただ一般の感情がそういうもんだっただけだ。実際の所、そうしたいという話をしたという事ですら、儂の聞いた所ではアレックス・クレイター一人じゃった。

H：ブライアリーさん、カリフォルニア州立大学フラートン校、日系米人オーラルヒストリー・プロジェクトに代わりまして、心から御礼を申し上げます。

Ⅲ. 総　括

フランク・ハリーは、インタビュイー中、最も若く、ブライアリーは、最年長である。ハリーは、13才から16、17才までを、マンザナー収容所のいわば隣人として過ごしたのであるが、クリークでの釣りなど思い出には牧歌的要素が強い。後に義兄となる男が収容所の憲兵であったというのが、収容所とのつながりと言える。(収容者の中に子供がいたのに気がつかなかったと発言している。また、「マンザナー事件」については、当然のことだが義兄の解釈を受け入れている)　当時のローンパインは「軍の町」であったという印象をハリーは受けている。戦後、ハリー自身が兵士としてヨーロッパに送られたが、そこでは物静かで自分達で固まっている日系人兵士達に対して好感情を抱いた。442連隊に対しては(黒人部隊に対するのと同じくだが)高く評価している。

一方、マンザナー収容所建設時58才だったA.A.ブライアリーのことを、ＯＨＣはcivic leaderと紹介している。カリフォルニア州は、1850年に州に昇格していたとは言え、ブライアリーの生まれた1884年のオーウェンス・ヴァレーは、まだまだフロンティアの雰囲気を残しているところだった。(因みに、フロンティアラインの消滅が宣せられたのは、1890年のセンサスの結果による)

ここで、マンザナーの地理的条件、オーウェンス・ヴァレーの住人の気風などについて、アラン・ボズワースの『アメリカの強制収容所』(Allan R. Bosworth:*America's Concentration Camps*,New York;Notson 1967. 引用には邦訳の森田幸夫『新版アメリカの強制収容所—戦時下日系米人の悲劇』新泉社,1983年を用いる)から引用したい。

> ……マンザナは最初の戦時転住所となった。それは本来仮収容所として組織された事実による。マンザナへいった人々には転住所の“そとでの”生活にもどるまで再移動の必要がなかったという意味で、同転住所はほかに例がない。マンザナは、スペイン語の“りんご園”という意味である。場所は、カリフォルニア州オーエンズバレーのインデペンデンス町の南二～三マイルのところで、シェラネバダ山脈の東にあたり、ほかの地域とはややかけ離れている。自然の変化がひどい地域である。日中は暑く、夜は寒い。よくあることだが、風がふくと、猛烈なすさまじい砂ぼこりのあらしが地面にうずをまく—それでいて、マンザナにはオーエンズ川の水がそそぐ緑地があり、そこからは、味のよいキャンタロープ(メロンの一種)や市場むけのほかの特産野菜がとれる。近くの西方には、アメリカ大陸最高の山であるホイットニー山が一万四千四九五フィートで空をつきさしている。またそう遠くない東南の方にはデスバレーがあり、アメリカでは最低地点—海面下二百八十二フィートとなっている。……(p.180)
>
> ……仕事にうちこんでいるオーエンズバレーの住民たちは、身体ががん丈でひかえめな人々であった。どうかすると、よそものをすこし疑うこともあるが、普通はいかにも西部の伝統らしく、困っているよそものをてきぱきと手厚くもてなす。立ちのきが実施される数年まえには、カリフォルニア州水道局がバレー峡谷の住民の川岸所有権を侵害したことをとがめながら、オーエンズ川の水をロスアンジェルス市に運んでいる水道管にダイナマイトをしかけたものもある。……(pp.180-181)

ブライアリーは言ってみれば西部のself-made manであり、経歴は多彩で、公選の職にもいくつも就いている。インタビュー時には89才と高齢であったが、応答には屡々小気味よいものがある。中国系移民の入国は1882年の排華法で息の根を止められるが、ゴールドラッシュの頃から「金山州」(カリフォルニアの中国人による呼び方)に渡ってきた中国系住民は、鉄道敷設労働から洗濯業などの職種にまたがって、西部の多くの町に住みついていた。子供の頃のブライアリーにも、中国人の姿は見慣れたものであったようだが、日本人はビショップの町のコック２人だけだったようである。ブライアリーの見解では、収容所の存在は、「ジャップ達は保護してもらえるところにいなかったら袋叩きにあっていた」であろうから正当化され得る。「アメリカ民衆の保護であるより彼ら日本人の保護であった」というこの観点に立つと、収容者がアメリカ市民であるかどうかは由々しい問題とはならなくなる。また、同様に敵国であったドイツやイタリアの血を引く者に対しても収容が必要であったかという設問に対しては、例えばドイツ系に対する敵意は存在していたと明言した上で、「無論人種感情って奴があった」とも率直に認めている。

他に興味深い点は、ラルフ・Ｐ・メリットについての言及である。前掲ボズワースの著作では「…しかし、自分たちの“前庭”に日系人は不要だと思うオーエンズバレーの住民が多い。西部防衛司令部のトム・クラーク軍属主任は、予想される問題の友好的な解決のために仕事をする市民委員会をつくってはと、オーエンズバレーの住民に依頼した。その結果、同地区の最も有名な人物の一人、ラルフ・Ｐ・メリットがこの団体の会長になった—のちのマンザナー転住所の企画主任である…」(p.181)と紹介されている。メリットは後の「マンザナー事件」(1942年12月６日)の際の収容所側の責任者でもあったので、強制収容についての著作には頻繁に顔を出す人物

である。ブライアリーは、メリットについて極めて手厳しい見方をしていたことを隠そうとしない。

なお、同じ年に行われた二人のインタビューであるが、フランク・ハリーは常にJapaneseという表現を用いているのに対し、ブライアリーはJapを連発している。45才という年齢差、育った年代の差の故であろう。

(因みに、フランク・ハリーのインタビューにおいてインタビュアーのハンセンが口にした言葉Jap-loverは、contemptuous wordとして日系人に好意的なコーカジアンに対し比較的よく用いられたが、勿論Nigger-loverを下敷きにした言い回しであろう。フランク・ハリーは耳にしたことがないと答えているが。)